

東京科学大学

公文書室だより

No. 10 (2025年3月31日発行)

令和6(2024)年度の出来事から

公文書室長 小林隆夫

今年度は東京工業大学に公文書室が設置され「国立公文書館等」の指定を受けてから10年目となる節目にあたります。それに合わせたわけではありませんが、広瀬茂久公文書室長(特命教授・東京工業大学名誉教授)が前年度末で退任し、その後任として4月に小林隆夫(東京工業大学名誉教授)が着任、10月には東京工業大学と東京医科歯科大学が統合して東京科学大学(Institute of Science Tokyo)になり、新たな組織の下で再スタートを切るという大きな変化がありました。大学統合に伴い、内閣府への公文書室の名称変更手続き、学内案内板の更新(①)、ホームページの更新、旧東京医科歯科大学組織との打合せ等、これまでになかった多くのことを経験しました。とは言え公文書室の所在場所や基本的な目的・任務が大幅に変わったわけではなく、この1年も従来と同様の業務を続けてきました。このような状況下での公文書室に関わる主なトピックスを以下に紹介します。

公文書室長着任のご挨拶

大学統合による東京科学大学の誕生により、本公文書室も2024年10月より「東京科学大学博物館資料館運営室公文書室」と正式名称を変更し、新たなスタートを切りました。その半年前に遡りますが、東京工業大学博物館資料館部門公文書室長を拝命した小林が、新大学でも引き続き公文書室長を務めることとなりました。

公文書室が置かれている「資料館」が設置された際の当初の目的・任務は、東京工業大学の歴史ならびに国内外の工業教育史にかかわる各資史料(大学文書および記録史料)を収集、調査・研究し、整理・保存して学内外に公開するとともに、教育・研究・年史編纂に役立てることとしていました。新大学においてもこの目的・任務の方向性に変わりはなく、新大学ではカバーする領域が理学・工学・医学・歯学・リベラルアーツを含むより広い「科学」に広がったことから、資料館もそれに応じて広い視点に基づいた活動を進めていくことになりました。公文書室の役割・機能も変わらず、統合後は両大学とその前身の特定歴史公文書等を受け入れることになります。

新室長の専門は情報系であり、アーカイブズの分野は門外漢であったことから、まずは法令(公文書管理法他)の勉強から始め、アーカイビングの知識獲得、関連講習会や会議への参加等、基本の習得にめまぐるしく時間が過ぎた一年間でした。専門性を活かして何ができるかを考えると、



時代の趨勢や社会の要請に応えるべく、DX化、デジタルアーカイビングとデジタルコンテンツの充実、生成AIの活用等の方向性が見えてきます。今年度はその第一歩として、特定歴史公文書等のオンライン検索を利用できるようにしました(②)。なお資料館が所蔵する刊行物等に関しては整理が追いついていないため、その検索対象は一部に限られますが、徐々に充実させていく予定です。

昨今の社会環境はDX化推進が進み、それと共に日々生み出される文書類はデジタル媒体を含めて膨大な量になり、過去と比べて加速度的に増えているようです。その結果、新しく生みだされた文書に押し出される形で古い文書は置き場がなくなり、廃棄・散逸しやすい状況にあるといえます。このような中、資料館・公文書室が持つ役割は重要であり、その時々状況に左右されず歴史的に価値ある資料を後世にしっかりと伝えることを続けていきたいと考えています。今後とも皆様方の益々のご利用、ご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

小西孝太郎関連資料

本学の前身東京工業学校の卒業生である小西孝太郎の関連資料を個人の方より寄贈頂きました(③)。小西孝太郎(1872-1908)は三重県飯南郡粥見村(現松坂市)に生まれ、1891(明治24)年に東京工業学校機械科を卒業、北海道製麻会社で現業練習を経て、翌年東京工業学校長手島精一

が臨時博覧会事務官としてシカゴ万博への出張する際、その随行員として農商務省に雇用されました。随行員の人選に関して詳細は不明ですが、手島の実兄である田辺貞吉の養女喜代子と結婚したのが小西孝太郎ということから、何らかの姻戚関係の影響があったかもしれません。1894(明治27)年には外務省外務書記生になり、その後上海、仁川、シンガポール、リヨン、アントワープの各領事館に赴任、1905(明治38)に外交官補になっています。同年8月から9月にかけて米国ポーツマスで開かれたロシアとの講和会議で日露講和条約(ポーツマス条約)が調印された際には、全権大使小村壽太郎外務大臣に随行しました。吉村昭「ポーツマスの旗」(新潮社1979年)には、小西が外交官試験に主席で合格しフランス語が巧みであったと紹介されています(講和会議での交渉は英語・仏語を使用)。1907(明治40)年にフランスよりレジオンドヌール勲章が授与され、1908(明治41)年には大使館二等書記官に任命されましたが、同年30歳代半ばという若さで病没しました。小西は外交官として有能であったと思われますが、短命であったためか一般にはあまり知られておらず、資料もそれほど多くは残っていないようです。このような中、本資料により小西孝太郎の人物像、社会や時代背景の一端を窺い知ることができるのではないかと期待しています。

大学院総合理工学研究科の廃止

2024年9月末に東京工業大学すずかけ台キャンパスに置かれていた大学院総合理工学研究科(以下「総理工」と記します)が49年半にわたる歴史の幕を閉じました。2016年4月の東京工業大学の教育改革により、既に新規学生の募集は停止していましたが、それまでに入学した総理工所属の最後の学生が9月に課程を修了し、在籍学生がいなくなったことによる措置です。

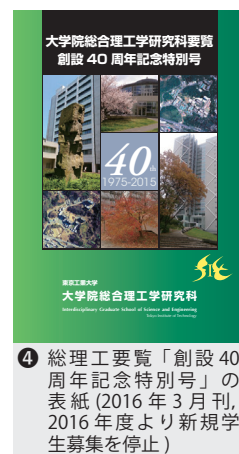
東京工業大学では昭和40年代から複数学部構想が起り、どのような学部体制とするか、新学部の設置場所をどうするか、といった議論が活発に行われた記録が資史料館・公文書室に残されています。最終的に横浜市緑区長津田地区に土地を取得し(現在のすずかけ台キャンパス)、大岡山地区とは異なる横割形式(インターディシプリナリー)の総合的な新専攻群からなる大学院の設置と大岡山キャンパスにある3研究所・2研究施設を移転することが決まり、1975(昭和50)年4月に学部を持たない我が国初の新構想大学院組織である総理工が誕生しました。創立から少し遅れてすずかけ台キャンパスに総合研究館とR2棟が竣工し、1975年9月には総理工の物理系三専攻と精密工学研

究所・像情報工学研究施設の研究室が第一陣として新キャンパスに移転してきました。その後、残りの総理工や研究所の建物、附属図書館分館などが順次完成し、1990年代には生命理工学部が加わるなどして現在のすずかけ台キャンパスの姿に発展してきました(④)。

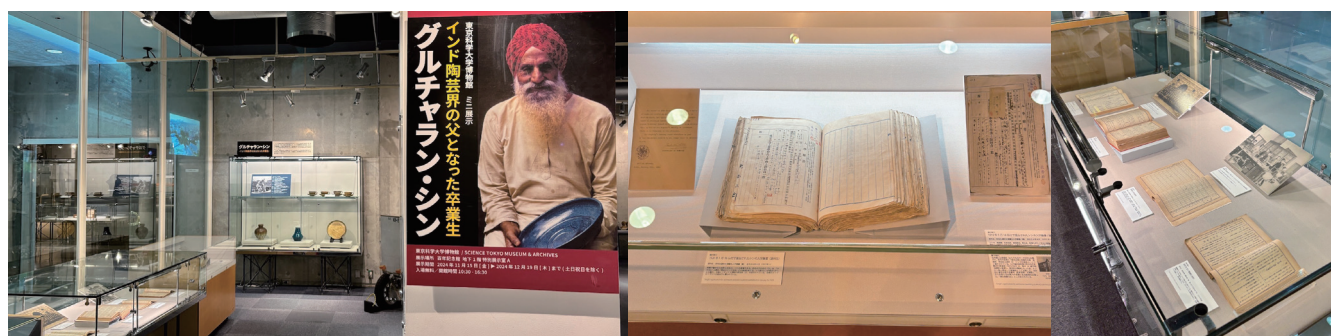
公文書室長の小林はすずかけ台キャンパスへの第一陣移転の翌年に総合研究館にあった研究室に卒論配属されて以降、大学院学生、教員として定年退職まで総理工とすずかけ台キャンパスに関わってきたことから、総理工の廃止は一抹の寂しさを感じています。

インド陶芸界の父となった卒業生 グルチャラン・シン / ミニ企画展示

公文書だより No.8(前々号)に「大正期に本学で学んだインドからの留学生 Gurcharan Singh (1898-1995) のドキュメンタリー・フィルム」を掲載しました。本学の前身東京高等工業学校の選科生として窯業を学び、インド陶芸界の父と呼ばれるようになったグルチャラン・シンの生涯と作品を紹介する映画の制作に、公文書室が協力した経緯を紹介しています。この映画“The LOTUS and the SWAN”が完成し、本邦初の上映会(本学博物館主催、学生支援センター共催)が大岡山キャンパス Taki Plaza に於いて2024年11月15日の夕方に開催されました。上映イベントには映画制作に携わった監督の Nirmal Chander 氏と関係者2名がインドから参加されました。上映後は監督のトークとQ & A タイムが設けられ、参加した学生、教職員、映画作成に協力した国内研究者との交流の場が会場の時間制限一杯まで続き、盛況のうちに上映会が終了しました。また上映イベントに合わせ、本学に寄贈されたシンの陶芸作品と在学時代の関連文書を展示公開するミニ企画展示「インド陶芸界の父となった卒業生 グルチャラン・シン」(2024年11月15日～12月14日)を博物館(百年記念館内)に於いて開催しました(⑤)。公文書室からはシンの入学願書が収められた特定歴史公文書「研究生選科生聴講生 入学願書」2点(聴講生:1919年9月、選科生:1920年1月)を展示すると共に、資史料館が所蔵するシン在籍当時の「東京高等工業学校規則」「東京高等工業学校一覧」や写真パネルを供覧しました(⑥、⑦)。



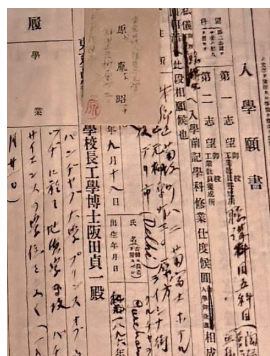
④ 総理工要覧「創設40周年記念特別号」の表紙(2016年3月刊、2016年度より新規学生募集を停止)



⑤ ミニ企画展示会場(百年記念館地下1階)

⑥ シンの入学願書(右:聴講生,中央:選科生)

⑦ シン在籍当時の学校一覧と写真



展示にあたり改めてシンの聴講生入学願書を見直したところ、思いがけない事実があったことがわかりました(⑧)。一つは住所として本郷区(現文京区)菊坂町にあった菊富士ホテルが記されていたことです。菊富士ホテルは多くの外国人、著名な作家や学者が寄宿したことで知られており、シンと同時期に谷崎潤一郎や竹久夢二が宿泊していました。1945年3月の東京大空襲で焼失し、現在はホテル

跡に建つ記念碑のみが残されています。菊富士ホテルについては近藤富枝「本郷菊富士ホテル」（中公文庫 1983 年）に詳しく描かれており、当時の様子を伺い知ることができます。さらに入学願書には保証人として原胤昭（1853-

1942)の名前が記されていることもわかりました。原胤昭は若くして家職を継いで江戸幕府最後の南町奉行所与力となりましたが、間もなく明治維新が起こったことから状況が大きく変わることになります。後にキリスト教に帰依し教誨師として活動、1898年に東京出獄人保護所を創立し出獄人保護の社会事業に尽力したことで知られています。原胤昭をモデルにした物が登場する小説に山田風太郎「明治十手架」(読売新聞社 1988年)や松井今朝子「銀座開化おもかげ草子」(新潮社 2005年他)などがあります。原胤昭がどのようないきさつでシンの保証人となったのかはわかりませんが興味深い発見でした。

訃報 道家達將名譽教授

東京工業大学博物館ならびに資史料館・公文書室の創設に多大な貢献をされた道家達将東京工業大学名誉教授（元東京工業大学博物館特命教授）が 2024 年 6 月享年 95 歳にて逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

令和 6(2024) 年度に受け入れた特定歴史公文書等のリスト (抄)

法人文書ファイル名	作成又は取得者
運営委員会 昭和 21 年 5 月	総務総務課
評議会 平成 5 年度	総務総務課
部局長会議 平成 5 年度	総務総務課
規則制定改廃 平成 5 年度	庶務部庶務課法規掛
生存者叙勲 (平成 25 年春) 平成 25 年度	総務部人事課労務室人材育成グループ
生存者叙勲 平成 25 年秋	総務部人事課労務室人材育成グループ
生存者叙勲 (平成 26 年春・秋) 平成 25 ～ 26 年度	総務部人事課労務室人材育成グループ
生存者叙勲 事務官 (平成 26 年秋) 平成 25 年度	総務部人事課労務室人材育成グループ
死亡叙位叙勲 平成 25 年度	総務部人事課労務室人材育成グループ
紫綬褒章 平成 25 年秋	総務部人事課労務室人材育成グループ
永年勤続者表彰 平成 25 年度	総務部人事課労務室人材育成グループ
文部科学大臣表彰 平成 25 年度	総務部人事課労務室人材育成グループ
学校基本調査 平成 15 年度	総務部企画広報室広報調査掛
学校基本調査 平成 25 年度	総務部広報・社会連携課 広報・社会連携グループ
収入・支出概算要求に関する文書 平成 26 年度	財務部主計課予算グループ
学長補佐室 平成 25 年度	総務部企画・評価課総合企画グループ
全学科目教育協議会 平成 25 年度	学務部教務課教育企画グループ
教育推進室教育推進会議 平成 25 年度	学務部教務課教育企画グループ
寄附講義 平成 30 年度	教務課
震災ボランティア 平成 30 年度	学生支援課
キャンパス整備計画室 平成 25 年度	学務部教務課教育企画グループ
国立学校施設実態調査報告書 平成 5 年度	施設部企画課企画掛

法人文書ファイル名	作成又は取得者
理学部教授会議事要録 平 5 年度	理学部庶務掛
工学部教授会 平成 5 年度	東京工業大学工学部庶務掛
生命理工学部教授会 平成 5 年度	生命理工事務グループ
精密工学研究所教授会 平成 5 年度	精密工学研究所事務掛
工業材料研究所教授会 平成 5 年度	工業材料研究所事務掛
資源化学研究所教授会 平成 5 年度	資源化学研究所事務掛
原子炉工学研究所教授会 平成 5 年度	東京工業大学原子炉工学研究所事務部庶務掛
常置委員長報告書綴 自昭和 35 年 6 月 至昭和 37 年 7 月	東京工業大学
常置委員長連絡会議議事要録綴 昭和 37・38 年度年	東京工業大学
常置委員長会議々事録 その他関係書類綴 自昭和 37 年度 至昭和 39 年度	東京工業大学
常置委員長会議議事要録綴 昭和 37・38 年度	東京工業大学
常置委員長会議議事要録綴 昭和 三十七年～三十九年度	東京工業大学
運営委員会議事録 昭和二十二年度	東京工業大学
運営委員会議事録 昭和二十三年度	東京工業大学
運営委員会議事録 昭和二十四年度	東京工業大学
運営委員会議事録 昭和二十五年度	東京工業大学
運営委員会議事録 自昭和二十六年四月 至同二十七年七月	東京工業大学
運営委員会議事録 自昭和二十七年八月 至同二十九年三月	東京工業大学
運営委員会記録 昭和二十九年度 昭和三十年度	東京工業大学
運営委員会記録 昭和 31・32 年度	東京工業大学
運営委員会資料綴 2/1 昭和 三十三・三十四年度	東京工業大学
運営会議議事要録綴 2/2 昭和 33・34 年度	東京工業大学
運営会議議事要録綴 2/2 昭和 33・34 年度	東京工業大学

公文書室 業務日誌（抄）

年	月	日	業務内容
令和 6 (2024)	4	1	小林隆夫公文書室長（資史料館部門長・特命教授）着任
		15	～6/29：各部局との法人文書移管に関する打合せ（Zoom, 対面）
		26	大岡山図書館職員の見学
	5	7	～7 /2：各部局の移管文書の回収
		27	教務課若手職員の見学
	6	6	～6/6：全国公文書館長会議（東京都千代田区 ベルサール九段 他）
		19	学内法人文書ファイル管理研修（移管手続きと公文書室の役割の説明・Zoom）
		25	～6/26：国立公文書館「公文書管理研修Ⅱ」受講
		28	内閣府へ大学統合に伴う公文書室名称変更申請提出
	8	5	国立公文書館「公文書館等におけるデジタルアーカイブ・システムの標準仕様書」説明会（Zoom）
		16	～8/30：資史料等審査部会開催（メール審議）
		26	国立国会図書館・内閣府「デジタルアーカイブフェス 2024」参加（Zoom）
		30	内閣府へ令和 5 年度特定歴史公文書等の保存及び利用の状況報告提出
	9	24	発掘！「東工大の研究と社会貢献」シリーズの No. 10「医科歯科大が誇る発明と東工大」を刊行
	10	1	大学統合により「東京科学大学博物館資史料館運営室公文書室」に名称変更
		23	国立公文書館「公文書管理研修Ⅰ」受講
		25	内閣府へ利用等規則改正に係る内閣総理大臣同意協議書提出
	11	8	湯島総務グループとの公文書管理に関する打合せ（Zoom）
		15	～12/19：ミニ企画展示「インド陶芸界の父となった卒業生 グルチャラン・シン」（大岡山・博物館）
	12	2	湯島総務グループ職員の見学
		26	内閣府へ利用等規則改正に係る内閣総理大臣同意協議書提出
令和 7 (2025)	1	31	国立公文書館「国際オンラインセミナー」参加（紙媒体のアーカイブズ資料の保存修復・Zoom）
	2	6	ジャパン・アーカイブズ・ディスカバリー（JAD）公開情報修正
	3	4	特定歴史公文書等の所蔵資料オンライン検索システムの公開
		26	資史料等審査部会開催
		31	「公文書室だより」No. 10 刊行

寄贈資料一覧 & 資史料館からのお知らせ

◆ 下記資料を寄贈いただきました（2024 年 4 月から 2025 年 3 月受領分の一部）。

寄贈者	資料名
北海道大学	北海道大学百五十年史 資料編一（2024）
広島大学	広島大学 75 年史 通史編（2024）
静岡大学	静岡大学人文社会科学部大学アーカイブズ史料集
蔵前工業会	蔵前ジャーナル（No. 1102～1107）
新聞部会新聞部	工業大学新聞（No.1004～1005）
非公表（寄贈者の意向）	小西孝太郎関連資料（393 点）
高津長雄	東京高等工業学校卒業アルバム（1916）
末包哲也	蔵前柔道会（誌）（1962-2019）
リベラルアーツ ILA	教養卒論 令和 5 年度第 3, 4Q 優秀論文集

寄贈者	資料名
宮内庁宮内公文書館	企画展 仁徳天皇陵と近代の堺（2024）
加藤祐輔	加藤セチと女性科学者たち（2025）
山崎鯛介	『田邊平學』（田邊平學先生 13 回忌記念事業会、1966）
工大祭実行委員会	工大祭（パンフレット）（2022-2024）
岡田大士	道家先生を偲んで（「道家達将先生感謝の集い」準備委員会、2024）
高橋幸雄	東京工業大学歌関係資料（7 件）
東京医科歯科大学	東京医科歯科大学創立五十年記念誌（1978）
東田修二	東京医科歯科大学医学部 80 年史（2024）

◆ 公文書室（G5-7F, 705 号室）及び百年記念館（2F, 企画展示室）で、「発掘！東工大の研究と社会貢献」、「資史料館 っておきメモ帳」を配布し、「note」にも掲載しています。「今月の一枚」も Facebook にアップしています。

東京科学大学公文書室だより 第 10 号 2025 年 3 月 31 日発行

編集・発行 東京科学大学博物館資史料館運営室公文書室

226-8501 神奈川県横浜市緑区長津田町 4259 G5-14 TEL 045-924-5501

E-mail archives@adm.isct.ac.jp URL <https://www.cent.titech.ac.jp/indexArchives.html>